

「日本の色」は、どんな色？

化学染料は一切使わず、天然・植物染料にこだわった染色法で、日本の伝統色を現代によみがえらせてきた吉岡幸雄さん。

文献を渉獵し、絵巻を吟味し、数多の装束や古裂を目にしてきた吉岡さんに「日本の色」の成り立ちについて聞いた。

染色家

吉岡幸雄

●よしおか・さちお 1946年京都生まれ。73年、美術図書館出版「紫紅社」設立。88年より「染司よしおか」5代目当主。『日本の色を知る』（角川ソフィア文庫）、『日本の色の十二月 古代色の歴史とよしおか工房の仕事』（紫紅社）など著作多数。

偶然、染屋に

——吉岡さんが五代目を務める「染司よしおか」は、いつごろから続いているんでしょうか？

文化年間からやっていて、かつては四条堀川を少し南に下がった西洞院の綾小路西入ルというところに工房がありました。堀川通というのは

水のいいところで染屋が多く、そのうちの一軒だったんですが、祖父が道楽で、工房を親戚に譲ってしまっただ。借金は帳消しでも、これでうちは一文なし。それを戦後になって、父が、いまの地（京都市伏見区）で再興したんです。

染色業というのはなんとというか、まず大店おおだながあって、その下に多くの職人がいる、ピラミッド型の社会に

とは距離をおいていた。それでも継いだのは、言ってしまうえば偶然みたいなものでした。

——家を継がれる前に、美術系の出版社を立ち上げていらっしやいますよね。実家の染屋に思い入れがあったからこそ、そういった分野にも興味があったのでは？

それも、そうではないんです。大を卒業するときにNHKの就職試験を受けて、厚かましくも落ちるとは夢にも思っていなかったんですが、見事に落ちて。そしたら母が、「大を出てるのに落ちるなんてカッコ悪い」「大学院へ行くなら行くで、就職するならしなさい」と、やかましく言うんですよ。母は高校生のときから僕をグータラだと見抜いたから、相当うるさく言わないとダメだと思っただけでしょうね。で、たまたま知り合いに美術関係の出版社をやって

いる人がいたので、そこに拾ってもらった後、二十六歳で無謀にも独立。三十くらいからようやく仕事が来るようになって、編集プロダクションをやったり、広告プロダクションをやったりしていました。

ところが、僕がちょうど四十になったときです。うちは弟が継ぐことになっていたんですが、その弟が、自分はやっぱり染色に向いてないから、すべて兄である僕にお返ししますと言っています。こら、えらいことになったと思いました。うちは東大寺のお水取りとか、薬師寺の花会式とか、寺社の年中行事に関わる仕事もしていますし、職人さんも抱えていますから、そう簡単に潰すわけにはいかない。そんなわけで、しょうがないから腹をくくったというのが、僕が染屋稼業に足を踏み入れたそもそのきっかけでした。

なっていましたね。うちは職人の側で、ある意味使われる側でもありませんから、そこはまあ、辛い面もある。そうやって何代か続いていると、権力に抗う人間が必ず出てくるもので、それが道楽者だった祖父の一面でもあったわけですが、高校生くらいになって物心ついてくると、そういう事情がわかってくるから、僕自身はできるだけ継がないようにと、家業

ある？ ない？ 日本の伝統色

僕の代になってまずやったのが、事業の縮小です。染屋は、基本的には着物屋からの仕事の手間賃で成り立っているんですが、着物の産業は、見るからにダメになってきています。どうしよう？ このままではこちらもダメになると思って、着物の問屋さんとの取引をすべてやめて、自分たちで作ったもんは自分たちで売ろうと決めた。また、化学染料は一切やめて、植物染に徹してやろうと決めました。

——そこで植物染一本に絞ろうと思っただけ、なぜでしょうか。

親父は染料の研究家でもあって、植物染料に始まって化学染料に移行し、いまに至るという染色の歴史を大事に考えていた。それで、化学染